中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会
コミュニケーション推進チーム（第５回）
議事録

日　時：令和４年 11 月 15 日（水）14:00～15:30
於　　：WEB 会議システム

議 題
（１）除去土壌等の再生利用・県外最終処分に対する理解醸成等について
（２）その他

（西川参事官補佐）それでは定刻となりましたので、中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会コミュニケーション推進チーム第 5 回を開催いたします。委員におかれましては、ご多忙の中、ご出席いただき誠にありがとうございます。本日は何とぞよろしくお願いいたします。

まず、今回の会議開催方法についてご説明いたします。本日の CT は、ＷＥＢ会議により開催させていただきます。一般傍聴については、インターネットによる生配信により行っております。

それでは開会に当たり、環境省環境再生・資源循環局担当参事官の馬場よりご挨拶させていただきます。

（馬場参事官）環境省の馬場です。座って挨拶させていただきます。これまで災害から 11 年が経ちまして、除染が進み、帰還困難区域を除いて、除去土壌が中間貯蔵施設におおむね搬入完了という状態になってまいりました。今後、2045 年３月までに、除去土壌等を県外最終処分しなければいけないという状況でございます。

そういう中で、親会議の戦略検討会で、2024 年度に県外最終処分に向けた技術開発戦略をまとめることになっております。その戦略の中で大きな柱が４つございまして、１つは減容・再生技術開発、２つ目が再生利用の推進、３つ目が最終処分の方向性の検討、４つ目が全国的な理解醸成ということでございます。

理解醸成につきましては、県外最終処分を知っているという方が福島県内で５割、県外で２割ということで、まだ十分に理解が広まっていないという状態でございます。2024 年に戦略を取りまとめた後には、再生利用・最終処分の具体化に移っていくわけでございますが、まずは知っていただくというところが極めて重要かと思います。

そういう中で、今日はこれまで先生方の意見を頂きながら、環境省で行ってきた理解醸成活動をご説明させていただきますので、今後どのように、さらに理解醸成活動を改善していくか、深めていくか、その辺りを議論いただければと思います。以上でございます。よろしくお願いいたします。

（西川参事官補佐）馬場参事官、ありがとうございました。それでは議事に入る前に、資料

の確認をさせていただきます。インターネットを通じて傍聴いただいている方におかれましては、案内の際に資料を掲載しているURLをご案内させていただいておりますので、ご確認をお願いいたします。

議事次第と、資料１－１、コミュニケーション推進チームの運営について。資料１－２、コミュニケーション推進チーム委員名簿。資料２、除去土壌の再生利用・県外最終処分に対する理解醸成等について。参考資料、対話フォーラムおよび環境再生ツアー等の効果検証についてという、５種類の資料をご用意しております。

また、本日の議事録については、事務局で作成いたしまして、委員の皆さまのご確認・ご了解をいただいた上で、環境省ホームページに掲載させていただく予定でございます。

それでは本日の出席者をご紹介させていただきます。委員名簿順にご紹介をさせていただければと存じます。まず、国立大学法人北海道大学の大沼委員でございます。続きまして、国立大学法人長崎大学の高村委員でございます。高村委員には座長を務めていただいております。続きまして、国立大学法人北海道大学、竹田委員でございます。続きまして、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の万福委員でございます。最後に、国立研究開発法人産業技術総合研究所の保高委員でございますけども、今日は遅れて参加と伺っております。どうぞよろしくお願いいたします。

（１）除去土壌等の再生利用・県外最終処分に対する理解醸成等について

（西川参事官補佐）それでは議事に入らせていただければと思いますので、ここからは高村座長にご進行いただければと存じます。よろしくお願いします。

（高村座長）よろしくお願いいたします。聞こえていますでしょうか。

（西川参事官補佐）はい、大丈夫です。

（高村座長）座長の高村でございます。委員の皆さまにおかれましては、ご多用の中、ご出席いただきありがとうございました。先ほどお話がありましたけども、福島第一原子力発電所の事故から11年半が経過しております。除染によって発生した除去土壌につきましては、昨年度の末までに、帰還困難区域を除くほとんどの除去土壌が中間貯蔵施設に移送されたと伺っております。

一方で、この除去土壌、東京ドーム11個分と聞いておりますけども、これは最終処分に当たっては、やはりボリュームを減らす減容化をすること、そして最終処分に向けていくという作業が必須でございまして、そう考えるとやはり除去土壌、技術的な問題、そしてそれをどう活用するかという問題、こういったものは非常に重要であろうと思います。

同時に、このことについて、やはり国民的な周知ということ、あるいは関係者への周知もそうなのですけども、いかに多くの方に問題共有をしていただくのかということが、非常に重要なポイントではないかと思います。

ここまで、このコミュニケーションチームのほうで議論をしてまいりました。それに沿っ

た形で、その意見を基に環境省でさまざまな取組をされていらっしゃると聞いております。本日はその報告も受けながら、やはりより実効性のある理解醸成というものについて、委員の先生方の忌憚ないご意見を伺えればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは議事に入りたいと思います。資料の１ですね。これは時間の都合上、紹介は割愛させていただきます。早速ですが、議題に行きたいと思います。議題の１、「除去土壌の再生利用・県外最終処分に対する理解醸成等について」として、資料２を用いて、事務局より説明をお願いいたします。

（西川参事官補佐）高村座長、ありがとうございました。それでは資料２について、ご説明差し上げます。

まず、私のほうから、「除去土壌等の再生利用・県外最終処分に対する理解醸成等について」ということで、今、理解醸成の取組について、環境省で取り組んでおります状況を、まずご説明差し上げたいと存じます。

まず、目次でございますけども、今、申し上げた取組状況についてということと、その後に来年度の理解醸成活動、これをどうやって進めていくかというところについても、先生方のご意見をぜひ頂きたいと思いまして、こちらも最後にご説明差し上げればと思います。

まず、こちらの３ページ目でございますけども、「全国的な理解醸成活動として取り組むべき事項について」ということでございます。昨年度末の令和４年３月 30 日に開催されました、中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会、こちらはコミュニケーション推進チームの親検討会でございますけども、こちらの検討会において、全国的な理解醸成の取組として、戦略目標である 2024 年度までに何を議論して、何を取り組んでいくべきかという事項を整理してございます。

全国的な理解醸成について、５点、実施内容をご説明差し上げておりまして、１つ目が、飯舘村長泥地区での実証事業を中心とした理解醸成の推進ということで、こちらの再生利用実証事業について、地元の方のご理解をいただきながら、今実施をしてございますけども、こちらの実証事業について、より広報、教育拠点化できないかということ、さらに中間貯蔵施設、こちらも現地見学会等を行っておりますので、それを継続的に実施してはどうかという内容になってございます。

２点目として、全国各地での対話フォーラムの継続ということで、今、全国各地で環境大臣が出席をする中で、現地の方々と再生利用や県外最終処分に向けた対話集会ということをやってきてございます。こちらについても、各地域の方々にどうしたらより参加していただくかというような工夫も検討していきたいというふうに、ご説明差し上げたところでございます。

さらに３点目といたしまして、次世代の方々、こういった方への理解醸成。これは非常に大事だと思ってございまして、例えば大学とかの講義、大学、高校、高専、また、中学での講義、また、学生向けの現地見学会等、こちら、先生の方々のご協力もいただきながら実施

してきているところでございますけれども、こちらも継続的に実施してはどうかというところでございます。

４点目として、さらに、SNS なども活用しつつ、理解醸成の取組、１から３、ご説明したような取組以外にも、何か取組が強化できないかということ。

５点目として、除去土壌を用いた鉢植えの設置ということで、目に見える形で再生利用であったり、除去土壌の安全性というものをお示しするにはどういった形がいいかという中での一つの取組でございますけれども、こういったものも設置拡大をするという、以上５点についてでございます。

こうした実施内容について、年度末にお示しさせていただきましたが、次のページ以降で、具体的に何を取り組んできたのか、主に今年度の取組中心になりますけども、ご説明差し上げたいと存じます。

前のページの５点と１対１対応しておらず申し訳ありませんが、大きく分けて６点、取組を実施してきてございます。現場公開の取組、全国的な理解醸成活動、環境再生ツーリズムの推進、広報誌の掲載、国内を中心とした情報発信と、国際的な情報発信、これら一つ一つ、詳細をご説明できればと思います。

こちらに、まず現場公開というところでございまして、飯舘村長泥地区で、地元の方、村の皆さまに協力いただきながら、除去土壌の再生利用の実証事業を行っているところでございます。この実証事業については、多くの方に見ていただけるように進めているところでございまして、このページでは団体の方、教育機関の方など、どういった方々に今まで視察対応をしてきたかという結果を取りまとめてございます。

こちらの資料にありますけども、今年度は 10 月末時点で、延べ 561 名の方に視察いただいておりまして、県内外の高校・大学、国や地方自治体の行政機関の方など、幅広い方々に団体での視察を来ていただいているというところでございます。

さらに現場公開の一つとして、一般の方に向けても、昨年から見学会を実施してきているところでございます。こちら、資料にございますけども、本年 10 月末までに計 280 名の方、受け入れてございます。現地見学会の中で、一般の方、アンケートを取らせていただいておりまして、アンケート結果についても簡単ですが、下にご紹介してございます。

実際に見学会に参加していただいて、「よく理解できた」といったご意見も多く頂いておりまして、また、右側の円グラフになりますけども、再生利用の賛否についても伺ったところ、同様に再生賛成のご意向を持った方も多くいらっしゃるというところでございますので、われわれとしても現場公開の中での効果を一定程度感じているところでございます。

しかしながら、アンケート結果、意見を幾つかピックアップさせていただいておりますけども、やはり下の「再生利用を進めることに反対する理由」に書いておりますような、再生利用の安全性の説明などに対して、われわれとしても改善すべき点、こうしたところもありますので、より良い運営に向けた検討を引き続き進めていきたいと思ってございます。

ここまでが現場公開でございましたが、ここからは全国的な理解醸成活動の取組状況に

ついてご説明差し上げます。まず、対話フォーラムの開催についてです。再生利用・県外最終処分に関する全国的な理解醸成活動として、対話フォーラムを実施しておりまして、各回の結果をこのページとその次のページでまとめてございます。

この対話フォーラムでは、それぞれ、大体２時間ぐらいお時間を頂きまして、環境大臣も出席させていただいた上で、また、高村座長にもご参加いただいて、各回、環境省、有識者の皆さま、開催地出身などの有名人、また、福島にゆかりのある方にご登壇をいただいています。

内容としては、会場またはオンラインの参加者の皆さまからご質問・ご意見を受けて、それに回答するような対話セッションというものを設けています。対話セッションでは、対話ボードに参加者からご質問・ご意見をいただいた付箋を貼って、それに回答していくという形で進めておりまして、こうしたやりとりないし対話を通じて、まずは除去土壌の課題について知っていただくと、理解を深めていただくということを目標にやってございます。

対話フォーラムについては、こちら第１回を 2021 年５月の昨年度から開催を始めて、計６回開催してございます。今年度に入って、第５回を４月に広島、第６回を 10 月に香川で実施してございます。対話フォーラムのアンケート結果については、毎回アンケートを取ってございますけども、次にご説明する参考資料の中で、アンケート結果どうだったかという詳細をご説明いたします。しかしながら、まだ工夫の余地はあるかなと思いますので、今後も実施していく中で、各地域の方に、より多くの方にご参加いただけるよう取り組んでいきたいと思ってございます。

続きまして、全国的な理解醸成活動の一環で、鉢植えの設置ということをご説明します。除去土壌を用いた鉢植え・プランターというものも、今、各所に設置してございます。設置をする中で、再生利用についての理解醸成というのを進めたいと思ってございまして、昨年３月に環境大臣室に鉢植えを設置して以降、総理大臣官邸や関係省庁、あと、新宿御苑などの環境省の関連施設にも設置しておりまして、現時点で 14 カ所 19 もの鉢植えなどを設置してございます。資料にございますけども、このいずれも、放射線量率を測定して、鉢植えを設置した前後の空間線量率に変化はないということもしっかり確認して、情報も公開してきてございます。

こうした鉢植えを設置することで、再生利用と除去土壌の安全性というものを可視化して、より分かりやすくお伝えしていきたいと思ってございますので、さらにこういった鉢植えについては設置拡大を進めて、いろいろな方に知っていただくということを進めたいと思います。

さらに、全国的な理解醸成活動について、大学生・高校生などを対象とした講義・ワークショップなども、今、実施してございます。やはり今後長い事業でもありますので、若い世代に向けた理解醸成、これは非常に重要な取組だと思ってございます。現状、大学・高校・高専・中学の皆さまを対象として、先生方のご理解もいただきながら、昨年度は約 30 校以上、今年度も約 30 の大学などで講義を実施してきている状況でございます。

また、講義と併せて、現地の見学会やワークショップも実施しておりまして、後ほど、また参考資料でアンケート結果もまとめてご報告いたしますけども、やはり講義と併せて現地も見ていただくことで、再生利用の安全性などの理解がより深まっていると考えてございます。

さらに、福島県内の高校などを対象として、環境省としても出前授業を行ってきておりますし、その中で長泥地区の環境再生事業の現地見学会も併せて実施しておりまして、こうした取組もぜひ実施していきたい、進めていきたいと思ってございます。

ここまでが全国的な理解醸成活動ということでございまして、ここからが環境再生ツーリズムの推進ということになります。環境再生ツーリズムを推進ということで、環境再生事業の現場ですね。中間貯蔵施設であったり、長泥地区の環境再生事業の現場、こういったところであったり、福島の復興の現状、これを実地に見ていただくということで、今、環境省としてツアーにも力を入れてございます。

こちらの資料でご説明しておりますのは、特に若い世代向けのツアーということを注力している中で、次世代ツアーということで、上の前半の部分になりますけども、学生に現地を見てもらいながら、そこで学んだことなどを学生自身に発信してもらうということもやってきてございます。

さらに、下の部分については有識者企画ツアーということで、万福委員をはじめ、委員の皆さまにご協力いただいて、こちらについても大学生の方々に現地も見てもらいながら、再生利用・最終処分、福島の復興について考えて学んでもらうということもやってきてございます。

さらに、ツーリズムを推進の一環で、より多くの方に現場を見ていただくためには、やはり環境省だけではなくて、他の機関との連携、これも大事かなと思います。例えばということで１つ例を挙げさせていただいていますが、福島県ともご相談をさせていただきながら、福島県が行っている取組のホープツーリズムなどと連携を検討できないかなと思ってございます。このホープツーリズムの中で、環境再生施設、中間貯蔵施設、長泥地区などもぜひ見ていただけないかなというところで、こちらの連携をぜひ進めていきたいと思ってございます。

ここは広報誌の掲載ということで、広報について取り組んでいる内容になってございますが、環境省として広報誌を発刊しておりまして、『ecojin』というものであったり、福島においては『ふくしま環境再生』、こういった広報誌を発刊してございます。こうした中で都度、中間貯蔵施設であったり、長泥地区の環境再生事業、こういった取組について一般の方にご紹介をするような取組も進めています。その中で、住民の方にもインタビューをご協力いただくなど、現地の状況をよりリアルに知っていただくような取組、こういったものも実施してございます。

ここからが国内向けの情報発信、幾つか取組をご紹介させていただきます。情報発信として、各種媒体の活用ということでございますけども、動画の作成等の媒体の活用、また、イ

ベントの出展などを取り組んでいるところです。一例として、動画を２つ書かせていただいていますが、環境再生事業の現地のワークショップに参加した学生のメッセージをまとめた動画として、「TO KNOW TO TELL」という動画も作成してございます。さらに、芸人の小島よしおさんに除去土壌等について学んでいただき、現地も視察してもらいながら、そこで学んだことなどをご自身の言葉で発信してもらうというような動画として、「小島よしおと一緒に福島を学ぼう！」という動画も作成してございます。

さらに、「福島、その先の環境へ。」という動画であったり、『福島環境再生 100 人の記憶』という書籍も、東日本大震災原発事故から 10 年を契機として、こういった書籍、動画についても作成しておりますし、また、表彰ということで、福島の未来に向けてチャレンジをしている方を表彰するような取組として、チャレンジ・アワードであったり、FUKUSHIMA NEXT、こういった表彰の制度なども取り組んでいるというところでございます。

こうした作成の動画については、われわれとしても情報発信はしていますが、例えば先ほどご紹介した対話フォーラムでも、全国各地で行う中で、こういった動画・書籍についてもご紹介をして、より環境再生事業について理解を一般の方に深めていただくために活用するというようなことも実施してございます。

さらに、各種イベントにおける福島環境再生の紹介ということで、県内外、東京であったり、大阪、福島、これは一例でございますけども、こうしたイベントにもわれわれ出展いたしまして、環境再生の取組であったりを紹介するブースを出しております。

ブースを出展する中で、東日本大震災の発生から除染、中間貯蔵施設の建設であったり、今後の県外最終処分、また再生利用の実証事業の取組状況だったり、一連の環境再生の取組について、パネルで分かりやすくご紹介をしたり、あと、長泥地区でお花を栽培しておりますので、そういったお花もご紹介させていただきながら、今までこういった取組を知らない方にもより共感してもらえるような、そういったブースについてもいろいろ工夫しながら出展しているというところでございます。

さらに、3.11 の時期におきましては、環境省で 2021 年の３月からシンポジウムを開催してございます。このシンポジウムの中では、環境再生事業の振り返りであったり、あとは福島の未来を考えるような、そういった取組もこのシンポジウムの中で議論しておりまして、若者をはじめとする県内外の方と福島の未来に向けたメッセージを発信するということも、年度末のこの時期にシンポジウムを開催しているというところでございます。

取組状況の最後のご説明になりますけども、国際的な情報発信、こちらも重要な取組として考えてございます。今までも英語版のウェブサイトによる情報の提供、関係の国際会合の参加、さまざまな取組を行ってきているところでございますけども、さらにということで、昨年は COP26 のジャパンパビリオンにおいて、左下の写真に書いてございますけども、セミナーであったり、展示を実施してございました。このセミナーや展示では、福島の環境再生の取組に加えて、福島の復興の状況、あと、脱炭素などの環境先進的な取組、こういったものに関する情報の提供をしてきたり、また、福島の特産品などもご紹介をさせていただく

など、情報発信を取り組んできてございます。

写真も満席の様子、書かせていただいていますけども、多くの方にセミナー・展示に来訪いただいておりまして、あらためてこうした取組を通じて、福島の復興の状況、また、環境先進的な取組状況などについて、国際社会の理解を促進する場になったと理解してございます。

また、今行われておりますCOP27、こちらについても、引き続きジャパンパビリオンの中で展示を行ってございまして、引き続きこうした場を通じながら、国際的な情報発信の取組を進めたいと思います。

右下のほうには、これはCOPとは別ですけども、海外メディア向けの現地視察会を今年の６月に開催してございます。海外の方も、プレスの方に中間貯蔵施設、飯舘村長泥地区の環境再生事業の現場、こういったものを見ていただく中で、福島の環境再生の状況についてご理解いただくような場として取り組んでまいりました。視察会の後、各国のメディアの方にそれぞれ持ち帰って情報発信をしていただく中で、国際的にもこの理解というのを進めていきたいと思ってございます。

さらにということで、上の囲みの中に書いてございますが、現在、IAEAと調整中でございますけども、除去土壌等の再生利用・最終処分等に関する専門家会合、こういったものも検討を進めているところでございます。

長くなりましたが、以上が今年度を中心としますけども、これまで取り組んできた理解醸成活動の内容になってございます。

続いて、この後、この資料２と、その後の参考資料の後に、議論をしていただきたい内容についてご説明したいと思います。

「来年度の理解醸成活動の計画の検討について」でございます。今回、まずはご議論をいただいた上で、次回のコミュニケーション推進チームにおいて、次年度の理解醸成活動計画を議論させていただきたいと考えてございます。次回の会合について提示をさせていただく、次年度の理解醸成活動の計画案、こういったものを検討するに当たって、例えば今までわれわれの取組をご紹介させていただきましたが、こういったものであったり、以下３点、例えば論点を分けさせていただきましたけども、こういったことについてご意見を頂けないかなと考えてございます。

１点目でございますが、理解醸成活動として行ってきた各取組、こういったものに対して、われわれとしてもどこまでできるかというところはありますけども、やはり効果検証を行っていきたいと思ってございます。こういった検証を行うに当たって、どういったところに考慮すべきか、どういったところに気を付けるべきか、そういった点についてご意見を頂ければと思います。

２点目として、全国的な理解醸成活動。対話フォーラムであったり、大学などの講義、除去土壌を活用した鉢植えの設置などについてご紹介させていただきましたが、今の取組を継続実施する中で、例えばどういうふうにさらに発展させていくべきか、どういうふうに工

夫させていくべきかということも論点なのかと思っています。

例えばということで、対話フォーラム、今、全国各地、比較的大きい規模での対話集会を実施してございますが、もう少し小規模の対話集会、車座のような形で数十人、10 人以下で車座になって、より議論をしやすくするような環境をつくる、いろいろあるかなと思います。今の取組の発展させていくべき方向性、そういったものをご意見いただければと思います。

最後になりますが、理解醸成のターゲット。こちらも次世代であったり、いろいろな方がターゲットとして考えられますけども、それぞれのターゲットに応じてどういうような施策を打っていくと効果的になるかを検討するに当たっての考慮すべき事項、こういったものもご意見いただければと思います。

こちらは一例でございますので、今までご説明した取組も含めて、今回幅広くご意見をいただければと存じますけども、一例として挙げさせていただきました。

長くなりましたが、説明は以上になりますので、続いて参考資料について説明をさせていただきたいと思います。

（水橋参事官補佐）引き続きまして、参考資料の「対話フォーラムおよび環境再生ツアー等の効果検証について」について、福島再生・未来志向プロジェクト推進室の水橋からご説明をさせていただきたいと思います。

今年度の取組に関する本格的な効果検証は、これから順次進めてまいる予定としておりまして、こちらの資料は本格的な効果検証の前段階といたしまして、今年度の前半で実施をさせていただきました現地見学会や対話フォーラムでのアンケート結果を集計させていただいて、少し考察をさせていただいたものでございまして、こちらについてご説明をさせていただきたいと思います。

まず、どのようなイベントで、どのような回答数だったかというものを最初の１枚目に記載をさせていただいてございます。今回、集計をさせていただきましたのが、８月に実施をさせていただきました３回の現地見学会・ワークショップと、９月に実施をさせていただきました現地見学会・ワークショップ、この４件を集計させていただいたのと、対話フォーラムにつきましては、７月に広島で実施させていただいたものになってございます。

上の枠書きの対話フォーラムの下側に米印で書かせていただいてございますけれども、対話フォーラムにつきましては、現地見学会ですとかワークショップと比較いたしまして、アンケートにお答えいただけた方の比率が少なかったというところも若干あるのと、あと、アンケート用紙が表裏ございまして、裏面に気付かずに無回答だった方もいらっしゃったものと推測されますので、後ほど次のスライドからアンケートの集計結果をお示ししておりますけども、対話フォーラムのほうは無回答というものが多く見えますが、それはそういった要因も少なからずあったということが推測されるという前提でご覧いただければと思っております。

それぞれのイベントの参加者の年齢層について、下のグラフに示させていただいてござ

います。現地見学会ですとかワークショップにつきましては、10代、20代の若い世代の方が非常に多くなっているということでございます。私どもといたしましても、若い方に、やはりしっかりと現場を見ていただいて、この除去土壌の課題について知っていただきたいというものがございまして、現地見学会につきましては、主に若い方向けにご用意をさせていただいたものになってございます。その一方で、対話フォーラムにつきましては、若い方だけではなくて、幅広い年齢層の方にご参加いただけているという状況でございます。

幾つかアンケートを取らせていただいたのですけれども、まず１つ目、「除去土壌の再生利用をする必要があると思いますか」というアンケートを取らせていただいております。上のグラフが現地視察会・ワークショップの事前アンケートの結果、それから２番目が事後のアンケートの結果、それから３番目にございますグラフは、対話フォーラムの事後アンケートの結果、それから一番下のグラフが、昨年度実施をさせていただきました、全国でのＷＥＢアンケートの結果になってございます。

この再生利用の必要性の理解について、上の２つのグラフをご覧いただきますと、現地視察会ですとかワークショップをやった前と後、やる前も結構高かったのですけども、やった後は９割以上の方が必要だと思ってくださっているということでございます。

それから３番目の対話フォーラムのグラフですけども、冒頭に申し上げましたとおり、無回答の方も結構いらっしゃるのですけれども、それでもやはり一番下の全国のＷＥＢアンケートと比べますと、「必要があると思う」「どちらかというとそう思う」という方の高い割合が見られたということでございました。

続きまして、「除去土壌の再生利用は安全だと思いますか」という質問になってございます。上の２つのグラフ、ご覧いただきたいと思いますけれども、現地視察会・ワークショップの事前と事後を比較いたしますと、先ほどの質問と同じ傾向になりますけども、やはり事後では再生利用を安全だと思ってくださる、どちらかというとそう思ってくださるという方が９割以上に上っているということと、対話フォーラムの事後のアンケートにつきましても、一番下の全国のＷＥＢアンケート結果と比較いたしますと、そう思う、どちらかというとそう思ってくださる方の割合が多くなっているという傾向が見られました。

それから続きまして、「除去土壌の再生利用を進めることに賛成ですか、それとも反対ですか」という質問に対するご回答になってございます。先ほどの２つと同様に、現地視察会・ワークショップの事前・事後を比較いたしますと、もともと高い割合ではあるのですけども、事後においては「賛成」「どちらかといえば賛成」という方が９割以上に上っているというところでございます。対話フォーラムとＷＥＢアンケートの結果につきましても、同様の傾向になってございまして、全国向けのＷＥＢアンケートと比べますと、対話フォーラム事後におきましては「賛成である」「どちらかといえば賛成である」とお考えの方の割合が多くなっている傾向が見られました。

それから次の質問ですけども、「皆さまご自身のお住まいの地域で除去土壌の再生利用が実施されてもよいと思いますか、それとも嫌だと思いますか」という質問に対するご回答に

なってございます。こちらも先ほどの３つの質問と同じような傾向が見て取れるかと思います。現地視察会の事前・事後を比較いたしますと、事後ではやはり「そう思う」「どちらかというとよいと思う」という方が９割以上。それから対話フォーラムと全国のＷＥＢアンケートの結果を比較いたしましても、対話フォーラム事後のほうが、よいと思う、どちらかといえばよいと思ってくださる方の割合が多く見られるという結果でございました。

それから、再生利用を進めるための条件の認識ということで、「除去土壌の再生利用を進めることについて社会的に理解を得る上で、どういった条件がそろっている必要があると思いますか」という質問でございます。こちら、複数回答可になってございます。次のページとまたがるのですけども、まず、一番左の棒グラフが「再生利用の安全性の確保」、それから「再生利用に関する情報の公開」になります。

こちらにつきましては、現地見学会・ワークショップの事前・事後で、ちょっと事後、若干下がってはいるのですけども、この２つについては必要だと思ってくださる方が、事前・事後ともに高いというところになってございます。

若干、これが下がっているのがなぜかというところですけれども、その右側の２つの「再生利用の必要性の十分な説明」ですとか、「国と地域住民による双方向性のある議論」、それから次のページにもまたがりますけれども、「国民的な議論ができる場」、こういった点について、現地見学会とかワークショップにご参加いただくことによって、自分が今回体験したような必要性をしっかりと説明してもらったりですとか、あとはコミュニケーションの場、そういったものが必要なのではないかと思われる方が、現地へ来ていただくと増えるという傾向が見て取れるかと思います。

今までのグラフがアンケート結果を集計させていただいたものになってございまして、その他、アンケートの中には自由記述で書いていただいたご意見もございます。その一部を、主なものをご紹介させていただきたいと思います。

現地ツアー・ワークショップにおきましては、再生利用に関する知識の習得ということで、「やはり環境再生の取組自体は進んでいることが分かったけれども、まだやっぱり課題が多いということが実感できた」というご意見ですとか、あとは、「こういった問題は身近な人に伝えていきたい」とか、「いろんな人に伝えていきたい」というふうなご意見が多く頂いていたというところで、やっぱり現地に来ていただくことによって、皆さんに伝えたいと思ってくださる方もどんどん出てきて、こういったことが伝播していくことによって、いろんな方の認知が上がっていくのではないかと思われるとこでございます。

その一方で、課題といたしましては、やはりスケジュール全体が厳しかったというところもあったりもするのですけども、「地元住民の方の生の声を聞く場が欲しかった」ということですとか、「被災者の方のご意見をもっと聞けたら良かった」ということで、参加者同士のコミュニケーションですとか、地元の方とのコミュニケーション、そういった場があったらもっと良かったというご意見を頂いておりました。やはりこの点は、より改善していかなければならないと思っております。

今も申し上げましたけれども、１泊とか２泊の中で現地をご覧いただいたりですとか、ワークショップをやっていただいたりとなりますと、やはり結構、時間的に厳しいところもあり、「もう少したっぷりいろんな施設を見たかった」というご意見も多かったというところでございます。

それから対話フォーラムに関してでございます。「関心のない人にも届くように情報発信が必要だと感じた」ということ、あと、「協力したい」というご意見、これは上の現地視察会とも同じような形で、自分が知ったことを皆さんにも伝えていきたいということを思ってくださった方もいらっしゃるということです。

それから対話フォーラムにつきましては、「反対の意見を持たれる専門家を招いてのセッションのほうが実があると思う」ということですとか、あと、これも上の現地視察会とも類似しているのですけども、「質疑応答とかコミュニケーションの時間を十分取ってほしい」というご意見があったというところで、この辺は改善点と考えているところでございます。

最後のスライドになりますけども、以上のことをまとめさせていただいたものでございまして、現地視察会とかワークショップ、イベント前後で再生利用の必要性理解ですとか、安全性への理解、賛成の割合が大きく向上しているところが見られたというところがございます。

現地視察会ですとかワークショップ、対話フォーラムの事後アンケート、両方において、昨年度の全国向けのＷＥＢアンケートの結果と比較すると、理解とか賛成の割合は高く見られたという傾向がございました。特に現地視察会とワークショップは非常に割合が高くて、たぶん、もともとの割合も高かったところもありますので、もともとご関心のある学生の方が、意欲のある学生の方が多く参加してくださっていたところも要因としてはあるのかなと思われるところでございます。

それから、再生利用を進める上での条件です。理解を得るための条件ということで、現地視察会の事前・事後を比較いたしますと、必要性の十分な説明とか、安全性はたぶん自分で見てみると何となく、結構、実感として分かってくるというところありますけれども、必要性を十分に説明することですとか、あとはコミュニケーション、そういったところがやはり大事なのではないかと考える方の割合が若干増えていたという傾向が見られました。

あとは、課題点。先ほど、１個前のスライドで申し上げた課題点のご指摘が複数見られましたので、そういったところにつきましては、今後取組を進める上では改善してまいりたいと考えているところでございます。以上で説明を終わらせていただきます。

（高村座長）ありがとうございました。それでは、ただ今の環境省からの説明に対しまして、ご質問・ご意見をお受けしたいと思います。委員の方からご質問・ご意見がある場合には、挙手ボタンでお知らせください。よろしくお願いします。竹田委員、お願いします。

（竹田委員）主に対話フォーラムのお話を聞きたいのですけれども、私もオンラインで幾つか拝見させていただきました。その時に、今回やはり感染症対策もあって、直接の参加者と、

それからパネリストの対話はなかったわけですよね。必ずボードに記載事項を付箋で書いて、それを貼り付けるという行為をしていたわけなのですけれども、ボードに付箋で貼られた内容というのは、今回のアンケート結果には反映されているのでしょうか。例えば、自由記述のところが最後にあったのですけれども、その点はまずいかがでしょうか。これ、事実確認です。

（水橋参事官補佐）ボードに貼っていただいたものと、アンケートでお答えいただいたものは、必ずしも一致はしておりません。ただ、中にはもしかしたら同じことを書いてくださった方もいらっしゃるかと思いますけれども、１対１で対応しているものではございません。

（竹田委員）ということになりますと、今後の展開を考えた時に、ボードに書いてくれたものというのは直接の意見です。非常に生の声が含まれていると思いますので、それを解析することによって、今後の展開、どういうことをしていったらよいのかというのが見えてくるのではないかなと思うのが第１点です。

第２点目が、これ、幾つかの企画ものをやっているわけなのですが、アウトカムとしての広がりですよね。こういう活動をやったからこういう展開があったとか、こういう活動をやったからこういう何かが生まれたというところを、もうそろそろ考えていったほうがよいかなと思っています。アンケートだけでは見られない部分は当然ありますので、社会にどういうふうにアウトカムとして発展していったかというのも、ぜひ今後見ていくべきではないかと思いました。対話フォーラムに関してのご意見、以上２つです。

（高村座長）ありがとうございました。他の委員から、ご意見・ご質問等ございますでしょうか。保高委員、お願いします。

（保高委員）保高です。環境省の皆さま、ご説明ありがとうございました。また、このコミュニケーションに関してご尽力いただいた皆さま、ありがとうございました。今日、また参加が遅れて申し訳ございません。

幾つかございますけれども、まず１点目、最初にお聞きしたいのが、このコミュニケーションチームの中で PDCA を回すという話がございました。先ほど、評価ということもお話がありましたが、それぞれの、今回６つの取組をされていて、現場公開、全国的な理解醸成、再生ツーリズム、広報誌、情報発信、国際的な情報発信。それが誰をターゲットにしていて、何を目標にしているのかということを、環境省で定義していただくというのが重要ではないかと思います。おそらく定義されているとは思いますが、そういったものを今年もう一回（本チーム会合を）やるような場合は、それをお示しいただいて、ターゲットに対してこういった目標を定めて、こういう効果があったっていうのを整理いただきたい。つまり、リスコミの中でも、偶然知る人みたいなケースがあって、ちょっと知りたいから来る人、さらに現場に行って深く知りたいから来る人、それぞれターゲットが違うわけですよね。そういった中で、どういったことを、誰にターゲットにしているかというのを明確にしていただくのが良いかなと思いました。

（高村座長）環境省いかがでしょう。

（西川参事官補佐）ありがとうございます。今、竹田委員のご意見、あと、保高委員からのご意見を頂いたので、いずれについても回答を差し上げればと思います。まず竹田委員から、対話フォーラムについて、２点、ご意見を頂いております。１点目については、対話フォーラムの中の対話セッションで、ご意見・ご質問というところを参加者の方に頂いている、まさにその生の声というのを実際解析して今後に生かすべきという、そこはまさにご指摘のとおりかと思ってございます。こちらについてはわれわれとしても頂いたご意見について、特によく頂くご意見というものは対話ボードのほうにも反映して、それを次の対話フォーラムでもご紹介するとか、より皆さまから頂くご意見を、また次の回とか、その次々回でご紹介する中で、さらにご理解を深めていただくようなことも考えておりますし、また、あとQA集なども今後作成をして、より皆さまから頂くご意見をまた発信していくようなことも考えたいと思いますので、ぜひこういったところについては、引き続き先生方のご指導をいただければと思ってございます。

また、もう１点、先生から頂いております、アウトカムとして、そろそろどういうふうに社会に広がっていっているのかというところをしっかり分析するということについて、まさにご指摘のとおりかと思います。現状、われわれとして、毎年度末にＷＥＢアンケートを実施して、その中で１年を通した理解醸成活動が、実際、理解度・認知度にどうつながっているのかというところは、現状、ＷＥＢアンケートでしかなかなか測りづらい部分はあるのですけども、そういったアンケートの活用とか、他にも何か方法がないかというところは、またこちらも検討していきたいと思います。

また、保高委員から頂いております、PDCAをしっかり回していくという中で、今お示ししているような各種取組、いろいろやってきておりますけども、ちゃんとターゲットを明確化して、定義をした上で、それが実際行って、どう効果が上がったのかというところをしっかり分析するということかなと思います。

現状、例えば講義とか、環境再生ツーリズムとか、一部については次世代向けだということを明示的にターゲットしながらやっているものもあれば、少しターゲットがぼやけたようなものもあるかなと思いますので、そこはあらためて次回の理解醸成活動の計画を考えていくに当たっても、しっかりその辺り、ターゲットを明確化した上で検討していきたいと思ってございます。ありがとうございました。

（高村座長）今の回答について、よろしかったでしょうか。竹田委員、保高委員。はい、分かりました。それでは、他にご質問・ご意見はございますでしょうか。

（保高委員）もう一つが、ターゲットとしては、今回のものは「国民的な」というところで、一般の市民の方々を目的としていると理解をしています。一方で、自治体の環境関係の方、これはおそらく県外最終処分なり、再生利用なり、みたいなことを推進していくわけでは、この事業がなぜあるのかとか、この意義というものを伝えていただくのはすごく重要な方になってくると思うのですけれども、そういった方々へのコミュニケーションというのは、今、環境省のほうですでにやられていることがあるのか。もしくは、こういったコミュニケ

ーションチームとして、やはり自治体の方も含めて伝えていくべきなのか、そういったところに関してお考えがあればお聞かせいただければと思います。
（高村座長）環境省のほうから、よろしいですか。
（西川参事官補佐）ありがとうございます。今ご質問、保高委員から頂きました、自治体の関係者にどう意義というか、再生利用・最終処分も含めてお伝えしていくかというところでございます。現状、われわれとしても、例えば環境省は廃棄物の行政も担当しておりますので、定期的に全国の各県、政令市の廃棄物担当部局との会議ということもやっておりまして、そういった中で各自治体の方が集まるいい機会ですので、われわれとしての環境再生の取組であったりとか、再生利用、また、県外最終処分に向けた方針であったり、そういったところは機会を捉えながらご説明をしてきているというところでございます。
　まさに今後、再生利用・最終処分を進めていくに当たって、自治体の皆さまについては、非常にこれ、キーパーソンというふうになりますので、今後もどういった形で伝えていくべきかと、方法があるかというところは、引き続き検討していきたいと思ってございます。ありがとうございます。
（保高委員）ありがとうございます。
（高村座長）万福委員、お願いします。
（万福委員）対話フォーラムに直接参加をさせていただきました。今までオンラインでずっと参加していたのですけど、初めて現地で参加をさせていただいた、香川の時ですね。やはり竹田委員からもご指摘があったとおりでございますが、会場とのやりとり、せっかく集まった方と、登壇されている方々の対話の場というのがなかったような気がするのですよね。どうしても付箋に書いて、貼って、それを開沼先生が丁寧にピックアップされながら、見解を個別に登壇者に聞いていくというスタイルになってしまうので、どうしてもオンラインで聞いていらっしゃる方々は、一方通行だなと感じてしまう可能性が高いのではないのかなと感じました。
　対話フォーラムという「対話」ですから、対話が一方通行だとフラストレーションがたまってしまうので、できれば対話の時間を、結果にもありましたけど、長く取るほうがより深まるのではないかなと思って。登壇されている方、運営されている方、環境省の方々は非常に大変だと思うのですけど、参加されている方々の満足度の向上というのに関すると、もう少し対話の時間を長く取っていただけるとありがたいと思いました。
（高村座長）何か環境省からコメントございますか。
（西川参事官補佐）万福委員、ありがとうございます。また、現地にもご参加いただき、誠にありがとうございます。まさにわれわれも毎回、かなり苦労しているというか、考えているところは、対話の時間を長く、どう取れるかというところで、アンケート結果にもありましたけども、やはりそういったご意見とかご要望はあるのかなと思っている中で、いかに対話セッション、対話の場を取るかということは、われわれも今後、対話フォーラムを実施していく中でぜひ工夫したいと思いますし、また、先ほど最後のスライドでご紹介いたしまし

たが、例えば対話フォーラムの開催方式をもう少し小規模にしてみて、開催方法を少し工夫してみるということも、一つ方法としてあり得るかなと思ってございますので、より双方向のコミュニケーション、議論ができるような場を今後もぜひ検討していきたいと思ってございます。ありがとうございます。

（高村座長）ありがとうございます。これ、私からちょっと追加のコメントをさせていただいてよろしいですか。対話フォーラム、私、第１回からずっと登壇者として参加しているのですけども。今出ているスライドで分かるかと思うのですけども、第１回はチャットからの質問に３問回答したと。第２回が 17 問ということで、１回目から２回目に行く時に、やはり私も意見として、いわゆる来られた方、あるいは参加されている方の疑問とか質問に、やっぱりより多く答えるべきじゃないかとご意見を申し上げたのですけども。

それで３回目から、確か山口前大臣になられたのだと思うのですけども。山口前大臣が、来た質問をなるべく全部受けるようにしようという姿勢が非常に強い方で、そういったフロア、あるいはオンライン参加の方の質問をできるだけ受けていこうという姿勢は、徐々に回を重ねるごとに出てきているのかなと思います。

一方で、万福委員が言われるように、本当の意味でのいわゆる対話というのが、なかなか時間が取れていないというのは、確かに登壇していても感じるのですよね。どうしてもああいう形式、つまり登壇者がいて、参加者が数十人いるという、あの形式だとなかなか限界があるのかなと、実際に登壇していて思います。ですから、先ほど環境省から提案があったような、いわゆる参加者を絞った車座形式のようなやり方というのは確かに一つあるのかなと思います。ただし、そうすると伝わる人数が限られてくるので、そこをどう克服するのかという問題も同時に出てくるかと思うのですけども。

そこはちょっと、先ほど PDCA の話がありましたけども、やはりどうしても試行錯誤の部分があるのかなというのは、これまでずっと参加して感じているとこですし、回を重ねるごとに改善はしているのかなと感じております。

（西川参事官補佐）高村座長、ありがとうございます。第１回目から参加をいただいている中で、各回でいろいろご意見も頂きながら、われわれとしてもできるところをというところで、先生、第１回目から第２回目というところをご紹介いただいてありがとうございます。

先生もご登壇いただく中で実際に感じていただいているという、対話の時間が十分ではないというところは、先ほどの万福委員への回答と重なりますけども、われわれとしてもどう工夫するかという中で、一つ車座の形式も一例として提案させていただいていますけども、そうすると確かに、参加人数が今度は絞られるとか、どう波及していくかというところの効果がもしかしたら少なくなるかもしれないという、両方良しあしというものはあるかなと思いますので。例えば、こういった対話フォーラムと並行して車座も組み合わせてみるとか、いろんなやり方はあるかなと思いますので、そういった辺り、ターゲットであったり、その効果をどう狙っていくかという中で、また委員の皆さまにご相談できればと思いますので、引き続きよろしくお願いします。ありがとうございます。

（高村座長）ありがとうございました。大沼委員ですかね。どうぞ。

（大沼委員）大沼です。大きく３つぐらいあります。まず１点目は、全体の確認なのですけども、「理解醸成って何よ」っていう話で、おそらくまず知っていただくという、認知度と呼ばれている部分ですね。そこがあって、それから分かってもらうだけじゃなくて、再生利用をすることについてご理解いただくということ。再生利用をすることにご理解いただくというか、承認していただくというか、受容していただくという、そういうステージがあるのだと思います。それも再生利用をすること一般というのと、先ほど保高委員が述べたように、自分のところに来てもいいかっていうところまで、できれば本当に理解いただくのが、おそらくわれわれのチームのミッションだと認識しています。

そういう目線で考えた時に、まず、これ、今日ご紹介くださった全ての取組は、効果検証の仕方は多少粗いところはあるけれども、過去数年やってきたことに鑑みてみると、確かに現地に来ていただければ、もともと関心が高い方とか、好意的な方という制約はあるかもしれないけど、よりポジティブに、より肯定的に意見が変わるという。これはもう結構何度も、毎年出てきている話なので、ぜひこういうことは続けていただきたいと思いますし、続けるべきだとも思います。現地の長泥地区とか、本当にご苦労されながら運営されていると思いますけども、やっぱりこれは続けなければいけないのかなと思うと同時に、現地に来られなくても対話フォーラムをすれば、少なくともしないで何も知らない方よりは肯定的な意見が出てくるということで、こういうこともやっぱりきちんと継続をしていかなければいけないのかなと思っています。

ということで、これは全体的な話です。まずこういったことを全体的に一つ一つ、おそらくそれぞれについてはきちんと効果がありそうだという感触が、ここ何年か続けてきて、対話フォーラムは去年からですけど、感触としてはいいのかなと思っています。

その上で２点目なのですけども、先ほど出てきた対話フォーラムの意見の拾い方なのですが、最初に少し竹田委員がおっしゃったのですけども、付箋の分析をしろというご意見があったのですけども。私、ちょっとこれ、当日見られなくて、後から振り返りで、ビデオで、動画で追っかけていたのですが、見ていると、これは私の感触なので本当かどうか分析していただきたいのですけれども、どうもチャットのほうがやや厳しめの意見があるように見えて。当日の付箋とか、当日のアンケートはそんなに過激に否定的な人ってあまりいなかったのかなという。

これは私の感触であって、本当にそうかどうか分からないので。そういうふうに、チャットだと何かネガティブなものが出てきやすいみたいな、そういう傾向はきちんと抑えていただく必要があるのかな。私の勘違いだったら、勘違いだという証拠を出していただきたいのですけども、もし私の感覚、嫌な予感が当たっていたならば、その対策を考えなければいけないということになるかなと思います。これが２点目です。

３点目ですけれども、最後、資料２の最後の説明でも、今ちょっと最後の説明でもあったとおり、ともかく十分情報公開はしていると。説明もまあまあしていると。ただ、双方向的

なコミュニケーションと国民的議論が必要だというのも、非常にあちこちで指摘されているというところで、じゃあそれに対して何をしたらいいのだろうというところで。

たぶん今後のやり方として、車座として小さなやり方ももちろんあるのですけども、少し対話フォーラムとの中間的なサイズの、市民参加ワークショップの手法というのがあって、大体 100 人規模で、小グループに、５～６人ぐらいのグループを 20 個ぐらいつくるような、そういう同時に小集団で議論するような場のつくり方というのがあるので。ただ、その運用の仕方は結構いろんなノウハウがいるので、その時にちゃんと専門家の方とか、行政の担当の方、今回の場合であれば環境省の担当の方とか、いろいろ付いていただく必要ももちろんあるので、それのデザインというのがあり得るかなと思っています。

それについて、実はいきなりやると、きっと怖いでしょうから、私のほうで今年度の終わりか来年度辺りに社会実験的にやってご報告できればと思っているところですが。できればこちらの環境省とも、実験的にやるのと、本格的に 100 人規模のワークショップを幾つも走らせるというのは、たぶんお金もマンパワーも要るので、その辺もちょっとご相談できればと思っているところです。以上、３つでした。

（高村座長）ありがとうございました。環境省からよろしいでしょうか。

（西川参事官補佐）大沼委員、ありがとうございます。３点、ご指摘いただいております。

まず１点目、こちら確認ということで、理解醸成について、まずは知って、認知して、さらに理解、再生利用についてご理解いただいて、受容して、さらに自分のとこに来てもいいよというような受容まで、いろんな段階がありますと。取組についても、今までさまざまやってきて、参加いただいている方がそもそも前向きな方もいるかもしれないですけども、肯定的なご意見とかご意向も確認できていますので、一定程度評価をいただいているのかなと思ってございます。

取組もさまざま、今日ご紹介させていただきましたが、比較的、まずは認知、知っていただくというところに注力してきている部分もあるのかなと考えておりますので、今言っていただいたような理解醸成について、どういうステップで、何をわれわれとして効果として狙っていくかというところは、それぞれの段階の中でしっかり整理をして、取り組み、展開していくべきかなと思いますので、その辺りも引き続きご相談できればというふうに思います。

２点目、対話フォーラムについてご指摘いただいてございました。オンラインの参加の方と、現場参加の方で、特にオンラインの参加の方からのご質問・ご意見というものは、やや厳しい印象があったと。そういった傾向があれば、実際ちゃんと分析をしたほうがいいのではないかというようなところでございます。われわれとしても、一個一個、全てしっかり分析しきれているわけではないのですが、確かにオンライン参加の方はいろいろ幅広くご参加いただいている中で、厳しいご意見を頂くことが多いかなというところは実感としてはございます。

そうした中で、どういった方からどういったご意見があって、それに対してわれわれとし

て何ができるのかというところは、今まで６回やってきていますので、しっかり分析をして取組につなげていきたいと思いますので、この辺り、しっかり分析をしていきたいと思います。

最後、３点目ということで、双方向のコミュニケーションを今後進めていく中で、一つ市民ワークショップのご提案をいただいてございます。誠にありがとうございます。

われわれとしても、対話フォーラムだとなかなか時間とか人数の関係上、双方向のコミュニケーションが難しい部分もあり、かといって小規模の対話集会ですと、また人数も限られるし、どういった形があり得るのかなというのは、まだまだ中でも議論を進めているところでございますので、もし社会実験的に今後やっていくご予定もあるということを今伺いましたので、またどういった形で連携ができるのかと、環境省としても何ができるのかというところは、ぜひ先生ともご相談をさせていただきながら、来年度に向けて検討していきたいと思います。ありがとうございます。

（高村座長）保高委員、お願いします。

（保高委員）自治体の方に伝える時、これは市民の方も同じなのですけれども、特に自治体の方々はその問題っていうのが自分事として捉えるのか、それとも自分事じゃないのかというのが、すごく重要なポイントになってくると思うのですね。そういった意味で、環境省がやっている現在の取組ということを聞くだけだと、これが自分事として捉えるのかどうかというのはすごく分からなくて。「あ、いいことやっているんだな」というふうな印象を持たれる一方で、こういった再生利用、もしくは県外最終処分というものが、自分の自治体に問い掛けられる可能性が将来的にあるかもしれないっていうことですよね。

説明の仕方というか、その話を聞いた時に、自治体の方がどのようにお考えになって、どのようなプロセスであれば自治体の方も含めた負荷が少なく進んでいくのかっていうことも含めて、意見聴取もうまくできるといいかなと思いました。そういう意味では、質問というよりはコメントですね。万福委員が何かコメントがあれば。

（万福委員）保高委員から言っていただいたように、自治体の方にどう説明するのか、どう受け止めていただけるのかということに関して言うと、やはり自治体の担当者というのは、自分のところに来る状況にならないとなかなか難しいし、あと、そういった、例えば環境省主催であったとしても、その場に職員を派遣すること自体にリスクを感じてしまう自治体もあろうかと思うのですね。ですから、先ほど西川さんからご説明いただいたように、環境省の廃棄物行政の中で「こういう取組をしています」という紹介をまずしていただいて、その中から「少し課題があるのです」というようなことを徐々に紹介していただくという、ソフトランディングのほうが。特段、集めて何かやると、また変な動きになってしまいそうな気がしますので、しっかりと伝えていくのであれば、そういう行政の中の会議の中でご紹介いただくところから、しっかり努めていただければと思いました。それは私の意見です。

（高村座長）ありがとうございます。環境省のほうから、何かコメントございますか。

（西川参事官補佐）保高委員、万福委員、ありがとうございます。自治体にどう説明して、

どう受け止めていただくかというところは、われわれとしてもしっかり考えたいという中で、先ほどご紹介した、廃棄物行政の担当者へまずは説明をするという一例を挙げさせていただきました。

例えばこういった機会も、今の会議にかかわらず、いろいろわれわれとしても機会がありますので、１回で終わらず、何回か、毎年なのか、毎回重ねていく中で、だんだん説明内容であったり、そういったところも工夫しながら、いかに最終的には自分事としていただけるような形で、方法をぜひ工夫していきたいと思います。まだこういうふうにというものが手元にあるわけではないのですが、またそういった中で先生方にご相談できればと思いますので、引き続きお願いします。ありがとうございます。

（高村座長）それでは竹田委員、お願いします。

（竹田委員）先ほど大沼委員から話があったように、国民全体の理解醸成というところの点では、今回の実施されている内容はそれなりの成果は出ていると思います。ただし、先ほどから意見が出ている、自分事としてどうかとなった時に、特に住民の皆さん、市民の皆さんが自分事として考えるというのはなかなか難しいところがありますので、今のこのやり方で自分事まで行けるかというのはちょっと難しいところがありますので、やっぱりそこは工夫が必要かなと思います。

それに関連して、先ほどもう大沼委員からデザインの話が出てしまいましたので、それはもうそのとおりだと思うのです。それを実際に、車座で少人数でやっていこうと思った時に、それを誰がどういう形でやっていくのかという、「誰が」のところですよね。どんな人たちが企画して実践していくかというところまで、裾野が広がっていくと考えなければいけないので、勝手にできるだろうというものではないので、そこら辺を考えていただきたいと思います。

最後に、学生向け、それから講義をやってワークショップをやっているのですけれども、やっぱ学生向けの教育の意味というのはすごく大きなところがあって、確かに意識の高い子どもたちが来てはくれているのだけれども、やっぱり彼らはこれから社会に出て、すぐ行政官なり、あるいは企業で働くわけですよね。彼らがこういうことを知りながら出ていくのは、非常に学生教育として意義があると思っていますので、その点の機会をつくっていただいてるというのは非常に重要かなと思っています。以上です。最後はコメントです。ありがとうございました。

（高村座長）ありがとうございます。環境省のほうから、何かコメントございますでしょうか。

（西川参事官補佐）竹田委員、ありがとうございました。

２点、コメントをいただきました、１点目ですね。今後、自分事として考えていただくための工夫というところについては、われわれはまず知ってもらうというところに注力をしてきたというところは、ご説明差し上げたとおりでございますけども、次の段階として、どう自分事として考えていただくかというのは、また１段階、２段階、工夫が必要かなという

中で、車座であったり、そういった、今後新しい取組をやっていくということについては、どうデザインしていくか、誰がどういうふうに、どのような形でというのは、効果も見据えながらよく検討する必要があると思いますので、また引き続きこういった場で委員の方々にご相談しながら、ぜひ検討していきたいと思います。

２点目の教育の意義については、われわれも次世代、これ、2045 年までの県外最終処分ということを考えた時に、やはり次世代にどうこの問題を知っていただいて、理解してもらって、自分の次の世代に関係してくる問題なんだということも感じていただくのは非常に重要かなと思ってございますので、この辺り、引き続き講義・ワークショップも含めて、理解醸成の取組に力を入れていきたいと思いますので、またアドバイス、ご意見等頂ければ幸いです。ありがとうございます。

（高村座長）ありがとうございました。予定している時間が近づいてきたのですけども。委員の皆さま方から、全体を通してのご意見・ご質問等ありますか。どうぞ。大沼委員ですね。

（大沼委員）１点、小さなことなのですけれども、誰にというターゲットの話なのですけども、確かに将来世代を担っていただく次世代、若者は間違いなく大事であることは、そこには論をまたないのですけども。一方で、実は 2024 年までに、次、どうやってこれ、再生利用していくのというロードマップを決めなければいけないので。これ、２年後なので、実のところ、今の世代の今の大人たちというのも、ちゃんとアピールしないと、分かっていただかなければならなくて。私も僭越ながら、細々と学生とこういった話をしたり、ワークショップをして聞いてみると、「自分はいいけど、大人たちが言うことを聞かないんじゃない？」みたいな、そういう声もちらほら出てくる時があって。やはりそういう方々にも、きちんと正面からコミュニケーションする場も、考えなければいけないのかなと。これはちょっと小さなコメントです。

（高村座長）ありがとうございます。環境省から、何かコメントございますか。

（西川参事官補佐）大沼委員、ありがとうございます。次世代もそうですけども、ご指摘のとおり、24 年度の戦略目標ということを考えていくと、さらに現役世代であったりとか、そのさらに上の世代も含めて、幅広い世代にこういった取組であったりとか、ご理解いただくというのは非常に重要だと思ってございます。それぞれの理解醸成の取組に応じて、ご参加いただく層とか、ご関心の層ってそれぞれあるかなと思いますので、それぞれのターゲットに応じた施策を考えていくという中で、各世代についてどう取り組んだらいいかというのは、まさに来年度の計画に向けてぜひ議論をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。ありがとうございます。

（高村座長）ありがとうございます。対話フォーラムをやっていて思うのですけども、実際会場に来られている方、このアンケート調査を見てもはっきり分かるのですけども、かなりやはり年齢層高い人が結構多いのですよね。ですから、場をうまく使い分けじゃないですけれども、それぞれの手法で、いろんな年代の人にアプローチしていくやり方は確かに重要ではないかなと、参加してみて感じました。保高委員、どうぞ。

（保高委員）最後に小さいコメント１つだけです。現地に滞在していただいて、中間貯蔵施設の見学等をしていただいてるのですが、どうしても現状ですと、中間貯蔵施設の技術的な内容を中心に伝える形になってしまっていて、中間貯蔵施設があった土地の歴史であるとか、人々の気持ち、思いといったものを、十分伝えきれてないのではないかと感じております。というのも、最近、そういった方のお話をよく聞くので、技術的な側面にプラスして、歴史とか、もしくは記憶といったものも勉強した上でどう思うかということを併せて、未来を考えていくのはいいかなと思っておりまして、その辺りもぜひご検討いただければと思います。コメントです。

（高村座長）ありがとうございます。今の件につきまして、環境省から何かございますか。

（西川参事官補佐）保高委員、ありがとうございます。まさにご指摘のとおりかなと思いまして、中間貯蔵の視察も行ってございますけども、やはり技術的な説明が多くなってしまうと。われわれとしても地元の思いというのはぜひ伝えていきたいと思ってご説明しておりますけども、やはりまだ十分でない部分もあるかなと思いますので、今ご指摘あったような、ご地元の歴史であったり、記憶、思いといったものを、今後どうやってお伝えしていけるかというところについては、中間貯蔵施設もそうですし、長泥の環境再生事業の視察も含めて、ぜひこういったところを工夫していきたいと思います。ありがとうございます。

（高村座長）ありがとうございます。対話フォーラムで、首長さんプラス住民の方の動画が流れ、非常に私はいいのではないかと思っています。例えば、事前学習としてああいったものを紹介するとか、何かそういう工夫があると確かにいいのかもしれないですね。ありがとうございます。万福委員、手短にコメントいただいてよろしいですか。

（万福委員）はい。今、先生からご紹介いただいたビデオの件と、あと、福島環境再生 100 人の記憶という冊子があります。われわれは例えば大学生とかに伝える時に、そういったものも用いるというのは非常に重要なのかなと。あと、工事情報センターにもだいぶデータが蓄積されているので、そういったのも少し活用しながら、保高委員おっしゃるように、現状だけでなくて振り返りの部分も重要ですよね。非常に共感するとこでした。ありがとうございます。

（２）その他

（高村座長）ありがとうございます。大体、時間になってきたようです。本日は委員の皆さまにおかれましては、長時間にわたって活発なご意見、貴重なご意見を頂きました。それでは進行を事務局のほうにお返ししたいと思います。ありがとうございました。

（西川参事官補佐）委員の皆さまにおかれましては、活発なご意見・ご議論、大変ありがとうございます。本当に貴重なご意見、誠にありがとうございます。今回、ご意見いただきましたことを踏まえまして、来年度の理解醸成の活動をどうしていくかということを、ぜひまた議論させていただければと思います。どうぞ引き続きよろしくお願いいたします。

冒頭申し上げましたとおり、本日の議事録につきましては、各委員の皆さま方にご確認をいただいた後で、環境省のホームページに掲載させていただきますので、こちらもご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは閉会に当たりまして、環境省の馬場よりご挨拶をさせていただきます。

（馬場参事官）環境省の馬場でございます。今日は大変ありがとうございました。本当に重要な意見ばかりでございましたので、十分踏まえた上で、来年度の理解醸成活動の計画を次回ご議論いただければと思います。また、付箋の話とか、現に手元にある既存のデータも宝の山だと思いますので、そういうところもしっかり解析しながら進めていきたいと思います。私からは以上でございます。本日はどうもありがとうございました。

（西川参事官補佐）ありがとうございます。それでは、本日の中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会コミュニケーション推進チーム第５回を閉会いたします。本日はご多忙の中、長時間にわたりご議論いただき、誠にありがとうございました。

以上